

多摩デポ通信 第64号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2023年7月16日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

●HP / <https://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

都立中央図書館を見に行きましょう、コロナ禍で中止になっていた書庫見学の実現です

今年度最初の「多摩デポ講座」に「都立中央図書館の書庫・資料保全室の見学と保存計画の話の話を聞く」を開きます。

都立中央図書館は改修工事のため長期休館していて、先月に再開館したばかり。改修後の書庫がどうなったか、また公共図書館では全国的に珍しい資料保全室の仕事を見学させてもらいます。さらに施設見学だけでなく、都

立図書館全体の資料保存の方針と現状、今後の保存計画なども説明してもらいたいと要望を出したところ、受け入れられました。

参加者それぞれに勉強になるのと同時に、多摩デポにとっては今後の足場となる情報が得られるのではないかと思います。

都立の指示に従った12人という人数限定の企画です。希望に添えない場合もあると思いますが、多摩地域の現役図書館長や職員の方も申し込んでいただければ有難いと思います。都立には、以下の依頼文を書いて申し込みました。

第41回多摩デポ講座・見学会

「都立中央図書館の書庫・資料保全室の見学と、 保存方針・保存計画の話の話を聞く」

- ・日時：8月10日(木) 午後2時～4時
- ・会場：東京都立中央図書館
(東京メトロ日比谷線 広尾駅下車1番出口から徒歩8分)
- ・集合：午後1時50分 中央図書館職員入口
- ＊多摩デポへの事前申し込みが必要です
- ＊12人限定 会員優先
(会員でない人も申し込みます)
- ＊参加申し込みは7月27日(木)までに
E-Mailで(宛先 depo_tama@yahoo.co.jp)



* *
①都立中央の書庫と資料保
全室の作業を見学させても
らい、②東京都立図書館の資
料保存の現状と今後の保存
計画等を資料に基づいて教
えてほしい。

都立の全蔵書のうちの開
架と閉架の割合、外部倉庫の
活用、永年保存と有期限保
存・その考え方、区市町村図
書館と共同で保存を考える
方向性について内部では検
討されていないのかなど。

最近「協力貸出」が都立
HPのトップで紹介される
ようになり、大変喜ばしい。
コロナ禍前の2020年3
月に同趣旨の見学+説明の
会を組んでもらっています。
都立からの連絡で直前の
中止となりました。仕方がな
かったですが、コロナが沈静
化し、申込めることを喜び期
待しています。よろしく。

* *
都立の説明を聞いてきて、
その先を考えましょう。

多摩地域ライブラリアン 講座を始めます

「多摩デポ講座」、「多摩
デポ実践講座」に加え、今
年度からはより対象者を
絞った「多摩地域ライブラ
リアン講座」を始めます。
詳細は同封した講座チラ
シをご覧ください。

ここでは講座の大づか
みの構成と意図を会員の
皆様にお伝えして理解を
いただきたいと思います。
また多摩地域の現役の公
共図書館員に向けた講座
ですから、資格のある方
はぜひ応募をしていただ
きたいと思います。

▽現役職員向け 12名限定の連続講座

チラシで、まず講座のライ
ンナップを見てください。
受講者には、第一段階で約
3か月の間に40分の講座を
11本受講してもらいます。

「多摩地域公共図書館概論」、
「地域資料活用論」、「ICT
活用技術論」、「実践力養成」
などで構成され、講師は多摩
デポ理事のほか、それぞれの
分野で活躍されている方を
集めました。録画を視聴する
オンデマンド講座ですから、
期間中はいつでも繰り返し
講義を受けられます。視聴し
パワポやワードのテキスト
を読んで、課題への回答を
してもらいます。

受講者には、講座全体の最
後に修了レポートを提出し
てもらいますが、8月中旬か
らはその準備として、少人数
に分かれてレポート作成に
向けたワークショップに参
加し、自分のレポートの課題
設定やそのブラッシュアッ
プをアドバイザーとの対話
から得てもらいます。

第二段階として、Zoom
による2日間のオンライン
講座に参加してもらいます。
受講者の自己紹介に始まり、
オンデマンド講義に対する

講師の補足や課題に対する
コメントを得たり、情報交換
したりする場になります。

講座では、講師が語る話を
聞くだけでなく、課題につ
いて講師と意見交換しレポ
ート作成をすることで、人材
養成をより図れるのではない
かと考えました。

修了レポートの提出、評価、
修了証交付までに、全体とし
て約6か月かかります。

▽なぜ「多摩地域ライブラリ アン講座」なのか

多摩地域では図書館を求
める住民の声に応え、197
0年前後に多くの公共図書
館が設置されました。その後
も活発な活動を続け、全国の
公共図書館サービスをけん
引してきました。

利用者に恵まれて多くの
人材を輩出した多摩地域で
すが、初期の担い手や次世代
の活動家が退き、今また、第
三世代（1960年以降生ま

れ)の層が現役を退く時期になりました。

まさにそれと同時に図書館界は、ICTの進展やDX(Digital Transformation)の波に揺られ、次の大きなテーマ設定を求められています。また人員削減や資料費縮減、施設再配置など、外圧や課題にさらされています。

図書館活動のデザインを描くため必要な、先達からのスピリッツやテクニクの継承を欠かすことはできません。多摩デポに蓄えた知識と企画力を、現役世代の養成と継承に使いたいとの思いが強くあり、加えて、多摩デポの求心力を維持し強めたいとの思いもあります。

このようなことを考え、今年度の柱の一つに、現役職員向けの連続講座を据えました。濃密な講座を企画し、講師やアドバイザーのサポートを用意しました。どんな講座を提供するかは、多摩デポのメッセージでもあります。

▽共同保存図書館構想を

共に語れる職員を

講座開催によって、養成する職員に何を求めるのか。

多摩デポが主張してきた共同保存図書館は、市民の情報アクセスを継続的に保障していくための実践的な活動の提案です。現在の理事・事務局と会員間の議論に加えて、新しく勉強した多摩地域の公共図書館職員を増やしていくことも多摩デポの目標に合うことだと考えています。

これまで「多摩デポ講座」では広く会員へ情報提供を行ってきました。一昨年度から始めた職員向け・単発の「実践講座」は次の企画を検討中です。これらは今後も続けていきますが、「多摩地域ライブラリアン講座」によって、多摩地域の公共図書館を担う人材を育てていきたいのです。

求める人材は、多摩地域の

図書館職員である自負を持ちながら新たなサービスに挑戦する職員であり、同時に資料保存の必要性を認識し、公共図書館のグランドデザインを描ける職員です。

受講料は5千円です。講師料や運営費を捻出するには厳しいものがありますが、高いクオリティの講座にしたと考えています。職員の方の支持を得、成果を上げて続けていけるか。課題山積ですが、会員の皆様のご支援をよろしく願います。

※詳しく知りたい方、申込むことをご考えの職員はHPもご覧ください。



- ・5月21日に開催した2023年度通常総会をへて新年度が動き出しました。
- ・紙面の構成の順番が分かりにくいかもしれませんが、ここ3ページまでが新たな事業や活動の提案、4ページからが行った活動の報告とそれに基づく今後の予定などとなっています。

- ・会員には総会報告は先月文書で送付しましたので重複は避けず。議案はすべて可決されました。

- ・次ページには総会記念講演会の記事を掲載します。主催側がまず報告を書くべきところ、感想を依頼した参加者の方が、講演の内容の分かる丁寧な報告と感想をお寄せくださいました。他の方の感想と共に読んでください。

- ・8ページには共同研究していることを詳しく載せました。私たちの関心や面白みを共有していただけたらと思っています。(H)

総会記念講演会

「国立国会図書館のデジタル化資料送信サービス」について

総会後には3年ぶりに講演会が行われ、国立国会図書館電子情報部電子情報企画課の佐藤奈緒恵氏のお話を伺いました。

講師からは35画面に及ぶパワーポイントの資料が提供され、参加者には印刷して配布しました。このデータは講師の了解を得て多摩デポのHPで公開しています。丁寧に作られた資料で、これを読むだけでも、同館のデジタル化サービスの概要をつかむことができます。

参加した会員に書いてもらった文章を以下に掲載します。講演の様子がとても分かりやすく書かれています。HPから配布資料を入手し、参照しながら読めばさらに理解が進むと思います。アクセスしてみてください。

講演会の報告と

考えていたこと

会員 川田淳子

I 講演内容

講師からは、「1国立国会図書館について」、「2国立国会図書館の資料デジタル化」、「3デジタル化資料送信サービス」、「4その先へ」という順番で、デジタル化資料送信サービス全般についての詳細な説明がありました。

「1国立国会図書館について」では、国立国会図書館の運営方針「国立国会図書館ビジョン2021-2025」「国立国会図書館のデジタルシフト」の説明がありました。この5年間で「国立国会図書館のデジタルシフト」推進期間と位置付け、7つの重点事業を定めています。そのうちの「インターネット提供資料の拡充」と「資料デジタル化の加速」に基づいて、デ

ジタル化資料送信サービスが行われているそうです。「資料デジタル化の加速」の説明では、この5年間で100万冊以上の資料をデジタル化し、本文のテキスト化も行って、今後の新しいシステムの検索や機械学習にも役立つことが謳われています。

「2国立国会図書館の資料デジタル化」では、デジタル化の経緯と現状が語られました。以前から行われていたデジタル化の転機になったのは2009年の著作権法改正で、予防的保存を目的としたデジタル化が可能になってから。

2009年から2011年にかけて大規模デジタル化事業実施のための補正予算合計137億円（通常のデジタル化予算の100年分）がつき、デジタル化が一気に進んだそうです。そして2014年にはいわゆるデジタルデータの図書館送信がス

タートします。

2021年には資料デジタル化推進室の設置、「資料デジタル化基本計画2021-2025」策定などがあり、デジタル化は勢いを増します。そして、2022年には個人送信が始まっています。

ここで留意したいのは、コロナ禍の影響です。2009年から2011年だけでなく、2020年度から2022年度にも「情報アクセス機会拡大・所蔵資料デジタルアーカイブ整備」という名目で補正予算が合計131億円付いています。



多くの大学図書館や公共図書館が休館し、不要不急の外出を自粛するよう求められるなか、資料へのリモートアクセス要望が高まったといえます。その他にも日本歴史学協会からのデジタル化資料公開範囲拡大の要望などもあり、コロナ禍が補正予算措置の背景となりデジタル化が加速したそうです。

「3 デジタル化資料送信サービス」では送信サービスの詳細な説明がありました。サービスは3種類に分かれ、①インターネット公開（著作権保護期間満了等）、②図書館・個人送信（絶版等入手困難な資料）、③国立国会図書館内限定公開（①と②に該当しないもの）。

この②では個人送信の対象資料は、図書館送信とまったく同じだそうです。対象資料に関しては、出版文化を守ることに、出版ビジネスとの棲み分けが大きな条件の一つで、入手できないもの、とい

うのが大事なポイントです。関係団体や機関との合意に基づいて送信が行われています。

個人送信を利用するには、利用規約に同意して登録し、ログインしてIDとPWを入力することが必要ですが、登録すれば個人の端末で閲覧でき、23年1月からはプリントアウトも可能となっています。同年2月末時点で個人送信の利用者数は約10.2万人、閲覧件数は2月は58.8万件。1月からプリントアウトが可能になり、閲覧件数が急増しています。

歴史・地理、芸術、文学の分野の利用が多いが、『人事興信録』等、人名や企業情報、国勢調査のような実用性の高いデータは恒常的に閲覧が多いとのこと。また、古書店販売サイト（日本の古本屋）へのリンクを設置しており、古書業界の活性化にも役立っている模様です。

「4 その先へ」では、デジ

タル資料の長期保存への取り組みや、ジャパンサーチ等の他のデジタルアーカイブとの連携による国のデジタル情報基盤の拡充への動き、全文テキスト検索や画像検索が可能な次世代ライブラリー「NDLラボ」の紹介がありました。

II 個人送信の利用手順

私は個人的に必要なものがあつて、今年3月に個人送信を利用しました。個人送信を利用するには、本人確認書類が必要な本登録をしなければなりません。登録はオンラインでも可能でした。新規登録画面から申し込み、本人確認書類として運転免許証のPDFファイルを登録画面にアップロードしました。本人確認の完了には5日間ほどかかるのでHPにはありましたが、実際には2日後に完了のメールが届きました。

国立国会図書館デジタル

コレクションの検索は、データベース全体で全文検索が可能です。キーワードで検索し、スニペット表示された検索結果一覧から絞り込んでいくことができます。選択した資料一冊単位でも全文検索できるので、該当ページにすぐたどり着くことができ、紙の本では索引に採用されていない言葉でもキーワードで該当ページがヒットします。

プリントアウトは、「印刷」というボタンがあるのでそれをクリックすると、注意事項を書いたウィンドウが表示



示され、そこで印刷範囲を指定して「印刷用ファイルを開く」ボタンをクリックすると、印刷用PDFファイルが作成されます。プリントアウトできるのは1回につき最大50コマ（1コマは、概ね見開き2p）まで。

不正利用を防ぐため、PDFファイルの画像下部にはIDと登録者氏名、ファイル作成日時が自動的に印刷され、さらに画像上部には利用者IDが電子透かしとして入ります。PDFファイルは自分の端末に保存し、そこから紙にプリントアウトができました。

Ⅲ 利用してみた感想

全体として非常に便利にできているという印象です。自宅に居ながらにして閲覧、プリントアウトまでできるのは隔世の感があります。この個人送信が可能になった背景には、やはり2020年

以降のコロナ禍があり、図書館が軒並み休館していた間、情報にアクセスできなかったことで痛手を受けた人々が多かった事実があるでしょう。デジタル化の加速も、個人送信も、ある意味コロナの産物と言えるかもしれません。

また保存と利用の両立のためのデジタル化ですから、原資料の紙の本を利用することはもうできません。であれば、紙媒体でしかできないこと（ページを繰ること）で得られる印象や概要の把握、一覧性などをデジタルでどうかカバーするか、またデジタルだからこそできる機能を追加していくことは、必須でしょう。

そういう意味では、全文検索はデジタルならではの優れた機能だと思います。全文検索をするには本文のテキスト化が必要ですが、デジタル化の一環として本文のOCR処理が行われており、そ

の文字認識率は平均96.8%だそうです。一般のOCRソフトの認識率より大変高い数値であり、効率よくテキスト化が行われていると思われる。また、目次リストから全体の概観を見ることがや、各画像のサムネイルを画面横に一覧で表示することで、紙に近い一覧性を補助しています。

その一方で、紙媒体独特の触感や質感、そこからピンとくる読書の勘所などの愉しみを得られないのは、どうしてもデジタルが越えられない課題として残っていくものだと思います。児童書では大きな問題となるでしょう。また、気になるのは今後のことです。

「4その先へ」でも課題として取り上げられていた、デジタル資料の長期保存は、常に問題になるでしょう。データは常に移植し続けなければなりません。媒体の脆弱性、再生装置の入手困難、技術の

陳腐化などはデジタルだからその弱点です。また今後増え続ける膨大な量のデータベースをどう管理していくのか。なお、いままでのデジタル化予算の8割は補正予算で措置されています。今後も増え続けるデジタル化を支える予算を確保するためにも、送信サービスだけでなく、今後の新しいライブラリー構想（他のデータベースとの連携や国際化など）も見据えて、社会に必要とされるデジタルデータ活用を、末端の利用者から国単位まで、全体として考えていく必要があると思います。

講演会に参加して

調布市立図書館
海老澤昌子

2022年5月から国立



国会図書館のデジタル化送信サービスに、個人配信が始まりました。

著作権の切れている資料や権利処理済みの資料はインターネット公開されていますが、著作権が切れていない資料で絶版等により入手困難なものを、登録すれば図書館に向くことなくPCで閲覧でき、2023年1月からはプリントアウトも可能となったのです。古い資料を探す人にとって非常に画期的なことだと思います。

私が勤務する図書館では、レファレンスに図書館向けデジタル化送信サービスを活用しています。

以前は自分も業務でデジタルコレクションを利用することが多く、調べものには非常に有効であると感じていました。

しかし最近レファレンスカウンターに出る機会が

減ってしまい、国会図書館のサイトにアクセスすることも少なくなりました。

2022年12月にデジタルコレクションがリニューアルしましたが、その頃には既にもあまり利用していなかったため、使いこなせなくなってしまうと感じていました。

今回の講演では、国立国会図書館のデジタル化事業について系統立てたお話を伺うことができ、自分の中で整理する良い機会となりました。今まであまり利用したことがなかったジャパンサーチの使い方などを興味深く拝聴し、また、「実験サービス」として、古籍籍資料約8万点が全文テキスト検索可能ということに驚きました。

講師である佐藤菜緒恵氏の語り口は優しくも明快で、とてもわかりやすいものでした。

デジタル資料の発展は、図書館利用に障害のある人々にとって読書バリアフリーの実現が期待できる事業の一つだと思います。「みなサーチα版」の試験公開が始まりましたが、「ユニバーサルアクセスの実現」に向けて、更なる今後の発展に期待したいと思います。



個人向けデジタル化資料送信が始まると

会員 田代守

当日、総会の前に会場の調布市文化会館たづくりで開催中の「上田優記写真展」を見学しました。エベレストの写真、登る人、地元の人、静止画の中に雄大な世界を見、地球上で一番高い場所に行くってどんな思いなんだろう

うと感じながら総会と講演会に参加しました。

講演会では、国立国会図書館が、新たにデジタル化したものについて、個人向けの資料送信を始めているとのことをお話。時代が変わりつつあることをひしひしと感じました。これまでの5年間で約100万冊の資料がデジタル化されたとのこと。すべてがすぐ個人向け送信にはならないかもしれないが、少しずつ広がっていくことは期待したい。講師の佐藤菜緒恵さんには、感謝と共に、今後説明を各地、各団体に向けてされるだろう時の忙しさを部外者ながら心配しました。

一方で、これからは、国立国会図書館の所蔵資料だけでなく、自治体で資料デジタル化を行っているところや公共図書館へも個人送信の要望が出てくるのではないだろうかと考えました。となると補償金のこと課題になるでしょう。また国立国

会図書館の未所蔵資料について、同館に寄贈すればデジタル化を行ってくれるというようなお話はありませんでしたので、今後の対応について検討が必要だと思いません。

「図書館界」Vol. 74 No. 6
p. 331～p. 349 の〈報告会〉
〈討議〉の参照を勧めます。



(株) カーリルとの
共同研究 定例会報告

ISBNが目録に未記載 の図書館蔵書へのISBN の推定と付与

— ISBN 導入初期頃の
目録補正の方法の研究
と実証的推定結果の提供

1 はじめに

毎号少しずつ伝えてきま

したが、府中市立図書館の協力を得て、昨年夏から同市の蔵書目録でISBN(国際標準図書番号)が未記載のものに、全国的な書誌情報との照合を元にISBNを推定する実験を行ってきました。結果が一段階を終えたので、どんな作業をしているかを報告します。

府中市の蔵書目録の書名、著者名、出版社、発行年などの書誌情報を図書館の蔵書目録や出版情報のビッグデータと照合して機械的に類似の書誌を探索し、ISBNが付与された書誌があればそれを候補として拾います。このコンピュータ上の作業で出されてきた候補リスト(=ISBNを推定できる可能性があるもの)を人の手で、書誌の詳細を見比べて検証、判定していきます。

検証結果を、以下の三つのグループに分けます。①蔵書目録に、このISBNを付与していいと確定できるもの。

②誤りや課題が含まれ、安易に推定できないもの。③多摩デポのTAMALAS(多摩地域公共図書館蔵書確認システム)だけでは推定できないもの。

目録情報を提供してくれた府中市立図書館には、推定の方法、検証作業の説明と共同の結果を返します(この推定結果を採用するかは図書館の判断です)。同時に、研究する側は、作業で得た知見を次の作業ノウハウに生かしていきます。うまくいけば、他の図書館にも同様のことを行い、各図書館の目録内容を補正し豊かにし、共同保存のための(図書館間の)書誌の同定に生かしていけるのではないかと。そういう意図で行っています。

6月30日には、昨年から提供してもらっていた目録データのうち、地域資料データについての結果報告を同図書館に行いました。同時に次の作業を依頼され、着手す

る準備をしています。

今までの作業をどのような行ったかの具体的な概略、背景、次の予定などを以下に書いていきます。

2 府中の地域資料の推定 作業(この項、箇条書き)

・1983年から約10年間の府中市立図書館の目録の遡及(さかのぼっての)入力を提案。

・まず依頼された地域資料の件数は11,013件。

(株)カーリルの突合(機械処理)によってヒットした件数は621件。

・「国立国会図書館蔵書情報」、「Books.or.jp」、「東京都内図書館DB(カーリルDB)」に機械的に突合する(DBの説明は文章の最後にします)。すると、ISBNがヒットする場合がある。3つのDBで、同じISBNがヒットする場合もあるが、あるDBだ

けヒットする場合、2つ以上違うISBNがヒットする場合もある。

・ここまではビッグデータ活用でコンピュータが機械的に行ってくれる作業。

・次に、ヒットしたISBNが正確か、違っているか、どのISBNが正確なのかを多摩デポが人力で検証していく。

・具体的には、DBでヒットしたISBNをTAMALASで検索し、人の目でヒットした図書館の書誌情報と照合。書誌(書名、著者名、出版社、頁数、大きさ、価格など)の詳細を参考に、同定(同じものとみなす)していいかを判定する。

・今回は、理事、事務局員8名で分担して行った。

・多摩デポとしてのISBN確定420件、要検討103件。TAMALASヒットせず98件。説明を付けて同市にお返しし、判断をお

任せした。

地域資料は希少性があるので、その目録整備を優先したいとの意向が府中市立図書館からはありました。その選択は納得ですが、地域資料は発行部数が少なく、市販されてないものも多い。それだけにISBNが見つかる可能性は低いのではないかと思われた。

フライングによる誤同定にならないよう気を付けたつもりで、この程度の数の確定となった。

3 ISBNとは？

日本の出版物への普及

ISBNは、元は書籍出版業界から、書籍というモノの流通のために生まれた番号管理の体系です。1970年代にイギリスで生まれ、後に国際的な管理番号として標準化されました。日本の書籍出版・流通業界に導入されたのは1983年からです。

今では書店やネット通販で売られる商品としての書籍には、発行時点で13桁数字のISBNが決められ、大半の書籍に付与されています。タイトル毎に違う番号のため、ISBNだけで「あるタイトル」を特定できるキーになります。

しかしこれらのことは、1980年代半ば頃は出版界でも常識ではありませんでした。出版社のISBN採用は「一斉に」ではなかったし、正しく番号を付けるルールの浸透にも時間がかかりました(今では、書店に置かれる書籍はISBN付きのものにほとんど置き換わり、書店のレジはISBNのバーコードを読取る仕組みが普通になっています)。

図書館の蔵書情報にも、ISBNが付いた書籍ならそれを入力しておくことは今では当たり前。その結果、利用者にはISBNをメモしておいて、それで検索すれば、

似た書名の本でも間違えることはありません。

4 図書館の目録への導入事情

1980年代前半までの図書館は、(紙の)カード目録で蔵書を管理し、職員が手書きで目録を作成していました。目録を作る時に、(ISBNがある書籍なら)ISBNを必ず記入しておくようになったのは、各自治体で違いますが、1980年代後半頃から徐々に、ではなかったでしょうか。それまでは新刊書にISBNが付与され始めても、必ず目録に記入しておくべき情報とはみなされていませんでした。

また、今では目録情報はデータベース化され、書店で販売されるような書籍ならば、データ会社で作った新刊書誌を取り込んで蔵書目録を作っています。公共図書館の仕事にコンピュータの導入

が進んでいくのも1990年代に入ってからでした。

したがって、どの図書館の蔵書目録も、1990年代までは書名・著者名の書き方なども含めて記入内容にばらつきがあります。検索時には一発で出てこなくても、検索語をあれこれ工夫して入れれば、実は所蔵が分かることがあります。まして同じ書籍が他の自治体にもあるかどうかを調べる横断検索の精度は、古い書籍には問題が多いのです。

5 初期の頃のISBNの遡及入力

図書館の蔵書目録には、どこも共通してこうした課題があります。

多摩デポと(株)カーリルが提供するTAMMALASは、ISBNを使って、多摩地域内の蔵書の特定と希少性の判定をします。ISBNが図書館界で普及した19

90年代以降には漏れが少ないですが、より効果を發揮できるようにするためには、それ以前の時期の目録を点検し、ISBNを遡及入力(さかのぼって付加)していくことも必要です。

1983年から10年分くらいの図書館の蔵書目録には、「ISBNが付与された書籍」だが「目録に記入されていない」ことがかなりある。この時期のブレはこの図書館にもあることで、今からでも補正できれば、ISBNを使った蔵書検索や目録データの管理の幅が広がると考え、研究しているのです。

6 今後の予定とボランティア募集

府中市からは、引き続き、同時期の(ISBN未記入の)児童書の調査を依頼されています。この目録データはまず(株)カーリルに送られ、目録ビッグデータとの機械

的な照合作業に入っています。この推定結果が返ってくる前に多摩デポでは、今回の作業で得たノウハウから、人力で行う検証・判定のためのマニュアルや作業工程を見直し、準備をしています。

地域資料と違い、出版社で作られ市販されたものがほとんどの児童書では、ISBNが推定できる候補に多数があがってくるのが予想されます。そのため、この文章を読んで趣旨を理解してくれた多摩デポ会員などの皆さんに作業に加わってもらい、一緒に判定作業を進めたいと考えています。実際にやってみると、これはとても面白い作業です。応募してくれた方には、まずZOOMを使った説明会を行い、作業は経験者とペアになって進めてもらおう予定です。

8月頃には、会員MLで「ボランティア募集」をご案内できる予定。一緒に多摩地域の蔵書データの整備を目

指していきませんか？興味のある方はぜひ参加してください。

末尾になりますが、今回の研究にご協力いただいている府中市立図書館には厚く御礼を申し上げます。

(注)

▼「Books.or.jp」各出版社(者)から提供される、国内で発行された紙の書籍・電子書籍の情報を収録。それを検索できるサイト。収録データは「出版書誌データベース」に蓄積した約230万点です。

▼「東京都内図書館DB(カーリルDB)」

(株)カーリルがこれまでに蓄積した、都内の図書館の書誌情報のキャッシュ(複製データ)のデータベースです。



今年度最初の

「里親探し」

多摩デポでは、今年度も「図書館資料の里親探し事業」を行っています。図書館が、図書館資料として再活用させたい資料を、必要とする図書館を探して譲渡の仲介を行うもので、年度当初には多摩の各図書館に案内をお送りしました。

初の申し込みは5月26日。町田市立図書館からの未利用の寄贈本『自由民権家中島信行と岸田俊子』（横澤清子著 明石書店 2006刊）の1冊で、「多摩地域の自由民権運動について有用な資料」というコメントが添えられています。

事務局では各自治体の所蔵状況を各館のOPAC等を利用して調べ、今回は全自治体にFAXや郵送で募集案内を送りました。送信後、間髪入れずに返信をくれたところもあり、6月7日の締

切までに4自治体から申し込みがありました。未所蔵の自治体を優先させていた。だき、日野市立図書館への譲渡が成立しました。

6月15日に事務局員が町田市立中央図書館で受け取り、その足で日野市立図書館へお渡し。お礼のメールをいただきました。

発行部数の多くない研究書などは、高価になることもあり、図書館では慎重に選書・購入の検討をするものですが、複部数を所蔵するよりは複数の所蔵館があったほうが良いだろうとのご判断だったと思います。譲渡する方・される方ともに嬉しそうに授受してくださり、この事業のやり甲斐を感じます。蔵書充実・欠本補充のためなど、提供してほしい資料のご相談もお寄せください。



本の紹介と感想

『地域資料とデジタルアーカイブーたましん地域文化財団歴史資料室を例にー』
多摩デポブックレット16

保坂一房 著

堀内寛雄（会員）

本書は2022年8月からYouTubeで配信された保坂一房氏の講演をもとに、加筆されたものである。著者は1990年より多摩文化資料室に勤務し財団設立と歴史資料室の開設に関わり、以後、今日までその運営管理に携わってこられた。2008年にも「地域資料の収集と保存ーたましん地域文化財団歴史資料室の場合」と題した講演をされ、その内容は、「多摩デポブックレット2」として翌年に刊行されている。今回は、歴史資料室所蔵資料の詳細と新たなデジタルアーカイブの発信について紹介されている。

まず「歴史資料室の概要」では、1975年に創刊された『多摩のあゆみ』について、「茶の間の郷土誌」という基本姿勢のもとに現在まで引き継がれていることや、多様な形態（図書・雑誌・地図・絵葉書・チラシ）の資料について、検索システムにより、資料群によって検索項目を変えて（地図の縮尺や絵葉書・チラシの地域名等）検索可能なことなどが説明されている。

また「地域資料の収集と整理」では、所蔵資料は、独自の主題分類、地域分類を設けて整理されていること、特に重要な資料として、自治体史、江戸期和本、戦前期図書、戦前からの市民研究団体が刊行する各種の「郷土史研究」誌が挙げられている。また地図・絵葉書・チラシ・リーフレット・ポスター・写真・包装紙・マッチラベル等の非図書資料の収納・保管方式の工夫（ボックスファイル・マッ

プロッカー・マップマスター・クリアファイル等の駆使)について、実際の写真が添付されて具体的にイメージできる。

さらに『「多摩のあゆみ」のデジタルアーカイブ』では、同誌のバックナンバーのデジタル公開について、具体的なキーワード検索(「玉川上水」「図書館」)の実例が紹介され、多摩地域に関する分野、各時代の事柄を調べる「エンサイクロペディア」|| 「百科事典」としての同誌が、より広範囲へ情報発信され活用できるようになったことが述べられており、「所蔵資料のデジタルアーカイブ」では、絵図・地図(「東京府郡区全図」)、チラシ(「鮫陵源案内」(戦前、平山駅北側浅川対岸にあった遊園地の案内図)、絵葉書(「井の頭風光」)など、多様な図版を用いて、画面上での資料閲覧にあたって、わかりやすく説明されています。

中でも「赤色立体地図」は、私にとっては特に有用な情報であった。高精細な立体表現を駆使した図面により、現居住地近辺の「国分寺崖線」の複雑さが初めて実感として理解できた次第である。

最後に、この間のコロナ禍もあいまって、デジタルアーカイブのアクセス数は急上昇しており、資料の利用を促す有効な方法として欠かせなくなっている。本書は地域資料のデジタルアーカイブの利用と可能性について、豊富な図版を駆使して親切的な説明がなされており、時宜にかなったガイドブックといえる。

(23年3月刊)

*ブックレットの基になった講演『地域資料とデジタルアーカイブ』たましん地域文化財団歴史資料室を例に』のYouTubeは現在も視聴できます。

[https://www.youtube.com](https://www.youtube.com/watch?v=f5UJc3m5qU)

[/watch?v=f5UJc3m5qU](https://www.youtube.com/watch?v=f5UJc3m5qU)

「Youtube 地域資料とデジタルアーカイブ」、「Youtube 多摩デポ」等での検索も可。

* * *

あなたはメーリングリストに登録していますか？

▼ I S B N 遡及入力の記事ではまもなく作業ボランティアを募る予定。会員メーリングリストで募集しますと書きました。ところでメーリングリストには登録していますか？

▼ 年4回の「通信」だけでは伝えきれないことも多いので、メールが使える会員の方はぜひ、会員のMLに登録してください。

▼ 1ページの「多摩デポ通信」の題字部分にも掲載してある多摩デポの連絡先(depo_tama@yahoo.co.jp)へメールで「ML参加希望」と「名前」を書いて申し込んでください。

□ 今号の内容 □

- ・第41回多摩デポ講座のご案内
- ・多摩地域ライブラリアン講座始めます
- ・総会記念講演会について 報告と感想
川田淳子、五十嵐昌子、田代守
- ・カーリルとの共同研究 定例会報告
「ISBN が目録に未記載の図書館蔵書へのISBNの推定と付与」
- ・今年度最初の「里親探し」
- ・「多摩デポブックレット®」紹介と感想
堀内寛雄
- ・メーリングリストに登録していますか？

★会の現勢

2023年7月15日現在

●正会員

(個人) 80名

(団体) 2団体

●賛助会員

(個人) 28名

(団体) 2団体

●年会費

正会員 五千円

賛助会員 一口二千円